

# 中山道本庄宿

街道に生きる人々

展示資料  
翻刻

## 第一章

『本庄城主小笠原系譜』

(前略)

信嶺

童名十郎三郎掃部太夫從五位下信貴嫡男

天文十六丁未生干信州松尾館也、天正十壬午六月十四日赴干駿州

府中以菅沼藤藏屬丁家康公也、天正十八庚寅九月以

家康公(勅方) 命移信州伊奈郡松尾采地於武州児玉郡本庄城也、慶長三

戊戌二月十九日丑十二歳武州豊嶋郡江戸館逝去、法名撤州道也大

居士、墓在丁本庄

信之

童名小平次左衛門太夫從五位下信嶺婿名跡也

元龜元庚午生丁参(三) 河国也、酒井左衛門尉忠次三男、母 家康公伯母、

天正十六 戊(勅方) 子八月以 家康公(勅方) 命為信嶺入婿矣、慶長十七壬子以

秀忠(勅方) 命移本庄采地、於下総国葛飾郡古河城矣、慶長十九甲寅四

月廿六日四十五歳古河城逝矣、法名龐岩了菴居士、墓在丁古河

(後略)

『天和二年 本庄町高千八百六十三石四斗三升四合の割付』

天和貳戌年

本庄町

武州児玉郡

高千八百六拾三石四斗三升四合

反別三百六拾三町三反貳畝拾貳步

上田貳拾町六反八畝拾八步

此取米貳百三石壹斗三升七合

中田九町九反貳畝廿壹步

此取米九拾三石五斗壹升貳合

下田八町六畝八步

此取米六拾八石六斗九升三合

原田壹町六反五步

此取米八石六合

肥土

上畑五拾町八反八畝九步

此取永五拾八貫五百拾五文五分

中畑三拾町七畝九步

此取永三拾壹貫貳百七拾五文九分

下畑拾六町七反八畝四步

此取永拾五貫七百七拾四文四分

原

上畑拾九町貳反貳畝七步

此取永拾四貫貳百廿四文五分

中畑五拾六町五反三畝廿四步

反六拾五文

反九斗八升貳合

反九斗四升貳合

反八斗五升貳合

反五斗

反百拾五文

反百四文

反九拾四文

反七拾四文

此取永三拾六貫七百四拾九文七分

下畑百壹町八畝七步

反五拾三文

此取永五拾三貫五百七拾五文四分

下々畑三拾九町五反拾八步

反百文

此取永拾三貫四百三拾二文

屋敷八町三畝廿貳步

反百文

此取永八貫三拾七文三分

合米三百七拾三石三斗四升八合

永貳珀三拾壹貫五百八拾四文七分

天和貳成年

横田五郎作

右者天和貳成年より元禄三年迄九ヶ年定免二書付差上候

『元禄八年 武州児玉郡本庄町当亥御成ケ割付之事』

武州児玉郡本庄町当亥御成ケ割付之事

一高式千百貳拾七石六斗八升四合

高辻

(中略)

田方三拾六町五反四畝拾步

内

上田拾町五反四畝廿六步

内壹町八反拾壹步

当亥検見引

残八町七反四畝拾五步

此取米七拾六石九斗五升六合

反八斗八升

中田拾貳町壹反九畝拾步

内貳町壹反五畝拾参步

当亥検見引

残拾町三畝廿七步

此取米八拾四石三斗貳升八合

反八斗四升

下田拾壹町貳畝三歩

内壹町九反八畝拾五歩

当亥検見引

残九町三畝廿八歩

(後略)

『元禄九年 武州児玉郡本庄町戌御年貢米永皆済目録』

武州児玉郡本庄町戌御年貢米永皆済目録

高式千百貳拾七石六十八斗四合内拾石七十六斗六合御年貢役

使高掛リ除之

一米貳百三拾六石七斗四升七合

田方本途

一永三百貳拾五貫貳百九拾貳文

畑方本途

一永九貫三百拾四文

糖藁草銭

一永五貫貳百九拾貳文

高係リ永

米合貳百三拾六石七斗四升七合

永合三百三拾九貫八百九拾八文

此払

米百貳百貳拾六石七斗六升九合

浅草納

米九石九斗七升八合

運賃

永三百三拾九貫八百九拾八文

永納

外

一米六石七斗六升四合

口米

一永拾貫四百五拾六文

口永

一永壹貫百三拾三文

上納金歩銀

右者元禄八亥御年貢米永并小物成高掛歩銀口米永共度々請取小  
手形を以勘定相究書面之通米運賃等之分指引之令皆済処仍如件

田庄太夫代

元禄九年子極月

矢嶋伴七<sup>㊦</sup>

大嶋武助<sup>㊦</sup>

本庄町

名主中

惣百姓

第三章

『本庄宿並助郷村々誓詞一件』

御請書

第二章  
『高札』  
定  
何事によらずよろしからさる事に百姓大勢申合せ候をとどうと  
となへとどうしてしゐてねかひ事くハたつるをこうそといひあ  
るいハ申あハせ村方たちのき候をてうさんと申前々より御法度  
候条右類の儀これあらハ居むら他村にかきらす早々其すしの役  
所江申出へし御ほうひとして

とどうの訴人 銀百枚

こうその訴人 同断

てうさんの訴人 同断

右之通下されその品により帯刀苗字も御免あるへき間たとへ一  
旦同類に成るとも発言いたし候ものゝ名まへ申出るにおゐてハ  
その科をゆるされ御ほうひ下さるへし  
一右類訴人いたすものもなく村々騒立候節村内のものを差押へ  
とどうにくわゝらせす一人もさしいたさゝる村方これあらハ村  
役人にても百姓にても重にとりしつめ候ものは御ほうひ銀下さ  
れ帯刀苗字御免さしつゝきしつめ候ものともこれあらハそれぞ  
れ御ほうひ下しおかるへき者也

明和七年四月 奉行

道中筋宿々役人共並助郷村々役人江前々誓詞被 仰付候処、い  
つとなく相止ミ候間此度東海道其外道中筋宿役人共江誓詞いた  
し候様被仰渡候ニ付別紙案文之通前書認メ血判者手代見届勿論  
宿役人不残役所江呼寄候而ハ宿場差支可申候間此度者支配限  
宿々江手代相廻誓詞為見届相濟候ハハ写ヲ以其段可申上勿論唯  
今誓詞いたし候者代り合後役之もの申付候節より役所ニ而繼誓  
詞申付候様可致旨被仰渡誓詞前書案文式通ツツ被成御渡右之段  
銘々御代官江可申聞旨奉承知候仍如件

山本大膳手代

天保七申年四月廿七日

高橋勇蔵印

外出役一同連印

起請文前書

一本庄宿江助郷之儀被仰付候少も我儘成儀ハ不仕本庄宿より舐  
次第馬急度出し可申事  
一本庄宿之衆を頼金子二而馬請負申間敷候  
一人通多時分馬を隠申間敷候事  
右之条々於相背者  
梵天帝釈四大天王総日本国中六十余州大小神祇殊伊豆箱根両所  
権現三島大明神八幡大菩薩天満大自在天神部類眷属神罰冥罰各  
可罷蒙者也仍起請如件

年号月日

郷村

庄屋

組頭

定使

道中

御奉行所

起請文前書

一跡々より伝馬宿江被 仰出候御法度之通相守可申事

一御武家方者不及申町人百姓等二至迄往還之面々江無理成義申懸間敷事

一人通多時分馬を隠し置無之おととて通候衆江偽を申人之附能荷物斗を附申間敷事

一助馬出候之馬二附にくき荷物を為附付能荷物者我等共町之馬二斗附申間敷候或者不入馬朝より呼寄或者用なくして日暮迄も置候儀仕間敷候

惣而不依何事助馬之方江非儀申懸間敷候勿論助馬之もの方より金子預馬請負申間敷候事

一奢たる儀又者費成事及心之程慎可申事

右之条々於相背者

但神 しハ式目のことく

年号 月日

本庄宿

問屋

年寄

名主

組頭

帳付

道中

御奉行所

(後略)

『宿方仕来心得方御尋ニ付書上控』

乍恐以書付奉申上候

一中山道本庄宿問屋年寄共一同奉申上候、今般五街道御取締為御用被為遊 御廻宿宿役人共勤向其外仕来心得方御尋ニ付、乍恐ケ条ニ仕奉申上候

一問屋共勤向之儀当時六人二而順番一人宛年番二相勤申候、平

日者右年番之者一人年寄一人宛御用多之節者問屋共不殘罷出無差支様相勤来申候

一年寄共儀 共九人二而順番一人宛十五日代り二月番相立相勤申候尤御用多之節者外年寄共不殘罷出無御差支様相勤申候

(後略)

『地誌書上帳』

戸谷貞治祖々父戸谷三右衛門ハ巨金ヲ支出シ字久保坂下式ケ所

ヘ石橋ヲ架ス、武州加美郡勅使河原村地内神流川渡費トシテ該

村ヘ金三百三拾五円及ヒ駅内伝馬為助成金三百円支出シ幕府勘

定所ヘ貸附ヲ購求シ利倍シテ以テ神流川渡費ヲ省キ行旅ノ便ヲ

興シ駅ハ伝馬ノ勞ヲ薄ス

## 第四章

### 『大名の宿泊記事（松代藩真田信安）』

延享三年七月十九日御国本へ

一 真田伊豆守様 御泊

○ 献上鮎巻鉢・御菓子、あわもち共三重、御次二重・御

用部屋へ同・坊主衆へ同・御台所御役人へ同・御徒士

目付へも出ル、旅籠式拾五人、外二五六人、但シ御巻

人二付百三拾式文宛、水風呂三ツ、番所表うら入、御

宿割り六日前、御関札共二、御荷物拾三駄、長持七棹、

金式両巻分被下候、御用有、屏風も入ル

祢津数馬様 玉子上

原小隼人様 同

御目付金井藤助様 玉子上

御台所役人 野中十三郎様

### 『加賀前田家 天保十三年三月十九日』

天保十三年寅年三月十九日御帰国

一加賀宰相様 御泊

上尾、本庄、坂本

献上鶏卵巻箱、但三十六人入・餅菓子弐重、拝領白銀

拾枚・染物三反、此代金八両三步式百五拾文

本陣請負賄夕四拾巻膳・朝四拾七膳、凡五拾人前用意、

巻賄二付丁銀錢百文宛

御関札式枚頂戴、行書御入口右之方、草書御出口左之方

三月十六日御出

御宿割、御宿拵共上下式拾五人、乗馬巻疋、外二宿巻軒用意可

致候、宿絵図江直様割込いたし御下宿不残御見分御座候、宿札

直二相渡候而ハ彼是混雜致候間、其段申上翌日宿々へ相渡申候、可相成丈ゆるやかに相打可申候、置状式通御渡被成候、扱無扱宿打替候ハハ書付二いたし置状差上候節一同上ケ可申候、酒肴差出申候

一 御上段天井、床下改、且前以掃除いたし置可申候

一 御膳水御改之節差支無之様用意致置可申候

一 御湯殿風呂道具取片付掃除致置可申候

一 宿絵図江張付候小札者此方二而相認メ申候

御番所

### 『くじ引きで決定の例 明和八年』

卯六月廿九日上州小幡へ

松平采女正様御内

一小倉又左衛門様

御通行之節、承之候二付、殿様願書相認、林五郎堀田村迄指

遣候所、暮二懸り候へ共御出無之二付罷歸候所、暮過二及候

而、則七左衛門方御泊之由承候二付、右願書拙「」差遣候所、

先達而七左衛門方御本陣願書、江戸表迄相届候得共、五年

已前小幡へ城請取二罷越、当宿泊之節、本陣願も被致候事故、

未御本陣者相決不申候、其元之義ハ古来本陣之由、殊松平下

総守様、松平和泉守様と御宿も被相勤候由、願書二相見得申

候へハ、御由緒も御座候、殊「今日」飛脚便を以江戸表、用

人目付役之者迄、此通之願書被差出候ハハ、七左衛門方後二

候へ共、何様、殿様御前二而鬮取二成共いたし、御本陣ハ決

可申候

（後略）

『本陣から大名への御宿願の例 文政六年七月五日』

二万石越後与板 桶川、本庄 七左衛門方  
一井伊右京亮様 御泊

右者此度初而之御入国二付、江戸御屋敷江罷出、延宝四年御昼  
休被為仰付候御由緒を以奉願上候所、七左衛門方方も段々再応  
願出候由二而隔番二被為仰付候、当日七左衛門当候、御機嫌窺  
二罷出献上玉子壹鉢御披露之上金百疋御目錄被下置、難有頂戴  
仕候、御懸り御道中方前沢彦八様二御座候

『長谷川平蔵の通行 安永二年七月十日』

安永貳年巳七月十日江戸へ

京町奉行

長谷川備中守様若殿様

一長谷川平蔵様御通行

右者備中守様御儀京都二而御病死被為遊候二付御家内一同  
江戸へ御引越、九日新町御泊二而町鼻迄罷出候、七ツ時当  
駅御通行被遊候処人馬差支、悴林太郎指出彼是御答申上候  
而人馬継立仕候

『本陣からの宿泊依頼①』

一筆致啓達候向暑之節、弥無御障珍重存候、然者今度蔵人儀江  
戸表江出府いたし候二付、此度道割相当り候間、泊宿之儀頼入  
存候、尤長途逗留も難斗候間近迎人被指出、其上二而用意可被  
致候、若差還り不行届候儀者不苦候、尤贈物など堅被及断申候、  
此段宜申遣様就被申候、如斯御座候、以上

六月廿三日 横山蔵人内

生熊八右衛門印

晦日清門印

本庄  
田村左惣次様

『本陣からの宿泊依頼②』

一筆致啓達候、弥々為御無異珍重存候、然者今般藤堂大学頭殿  
御用先二而被罷参候処、勝手向殿被取締候条、音信并人向江馳  
走振等之儀決而無之様致度候、若御用意等有之候共、賢及御断  
会釈被致間敷候間、此段前以申入置候、右可得御意如斯御座候、  
恐惶謹言

三月十八日 留増善左衛門印

田村左惣治様

右之通値上仕度候之間、何卒御勘弁を以御聞濟被下候様偏二御  
願申上候  
以上

宿内酒食商売

仲間惣代

新田町

庄左衛門印

勇次郎印

(以下四町八名略)

宿御役人中

(以下五町五十五名略)

第五章

『酒食商人仲間規定書』

覚

一 御公儀様御法度之趣臨時御触堅可相守候

一 仲間議定之儀、不依何事一統不洩様可相心得候

一 仲間内ニ而臨時或何等之儀出来候とも相互ニ助合其人老人之

難渋ニ不相成様可致候

一 商売之諸品値段相定之通仲間一統無高下可致売買候

右之通仲間一統急度可相守候、以上

書付を以御願申上候

右者惣代之者共一同御願申上候、此節米穀高値ニ相成諸品元値

段引上一統難儀至極仕候二付、値上左ニ申上候

一 飯 一膳二付 拾弍文之処 拾六文

一 そば

うどん 一膳二付 拾六文之処 拾六文(弍拾文の誤記方)

一 酒 壹合二付 弍拾八文之処 三拾弍文

『仲間申合セ取極書之事 (繭絹仲間一統渡世向議定書)』

仲間申合セ取極書之事

一 繭仲間之儀者前々申合セ取究め有之聊無違乱相守繁昌致来候処

近來区々ニ相成勝手宜敷場所又者自宅ニ而売買仕さも無之もの

者秩父屋庄吉宅江持寄取引我儘致候故追々市場衰微出市之もの

無少此儘打捨置候ハハ自然市場之姿も無之様相成可申繭類之儀

者当国第一之産物市場斯成行候而者宿内一同不益之基実々以歎

ケ敷且者其業之冥理を弁へ今般一同集相談之上糸絹大織仲間江

も申談両商人入交り当分之内絹場繭定座一市代りニ相立相互ニ

出精再吟味致無不実正路ニ取引候ハハ追々出市之もの相増先年

之通繁昌可仕左候ハハ仲間一同之為筋ニ可有之旨此度絹繭仲間

示談行届キ候上者行事外市場世話人見立之一同之もの其差凶違  
変致間敷候又者市場ニおいて私之利欲ニ迷ひ口争ひケ間敷義不  
致仲間内睦敷相慎可申候

(後略)

『宿助郷人馬日メ立会改書上帳』

(前略)

五月壹ケ月宿助郷繼立メ

人足 弍千四百六拾八人

馬 千拾四疋

此訳宿

人足 九百六拾九人

馬 千拾疋

助郷寄高

人足 千九百六拾六人

馬 千四百四拾三人

繼立

人足 千四百九拾五人

馬 千百八拾疋

辰し

人足 四百六拾七人

馬 弍百六拾三疋

助郷惣代

七郎右衛門

同断 半太夫

年寄 次郎兵衛

同断 七郎右衛門

問屋 茂右衛門

(中略)

右者去卯年宿助郷人馬日〆帳奉書上候所相違無御座候、此段御聞濟被成下置候様奉願上候、以上

天保三辰年

中山道本庄宿

助郷五拾ヶ村

惣代 半蔵

右宿年寄 次郎兵衛

同 左惣次

問屋 茂右衛門

道中

御奉行所様

『助郷人馬対談書』

今般

尾州様御参府被為遊候二付人馬多分御繼立二付御伝馬人馬差出方仕然ル上者問屋中より触当刻限聊無遅滞人馬差出可申候最勤中禁酒者勿論勝手我儘成勤向不致候様可仕候都而御用中急度慎居御伝馬大切二相勤可申候且村役人附居心得違無之御用御差支不相成様可仕候為念対談いたし置候以上

附老人前髪之者等不差出様可致候

寅二月五日

一人足 四拾五人

馬 五疋

(中略)

〆人足 千五百六拾四人

馬 式百四拾六疋

(後略)

小和瀬村名主

八十八印

【展示史料用語解説】

繼立…宿場ごとに旅客や荷物などを継ぎ送る（人馬を替えて送ること）。

高辻…石高の合計のこと。

本途…本途物成・物成ともいい、田畑・屋敷地に課した本年貢。

口米…田畑の年貢高に応じて課された米納の付課税。

口永…年貢米に賦課された税の内、金納するもの。

徒党…仲間・一味を組むこと、一機などを企てて集まること。

強訴…百姓が徒党を組んで、領主・代官などに強引に訴えること。

逃散…百姓が申し合わせて、居住地から逃げ去ること。

※参考文献 林英夫監修『音訓引き古文書字典』（柏書房、二〇〇四年）